

木曾川



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《輪之内町》

町の歴史は川の流れとともに、治水事業とともに

AREA REPORT

干害を越え、湛水被害を乗り越えて、
充実の一途をたどる用排水事業

気ままにJOURNEY

大樽川の水面に映る、今昔物語

歴史ドキュメント

大正改修と支派川改修事業

TALK&TALK

揖斐川支派川での大正改修を診る

民話の小箱

ぞうすい祭り 上大樽・神明神社

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに、
考えていきたいと思います。
新春号は四方を川に囲まれた輪之内町から、
輪中の成立や治水・用排水事業の変遷を、
大正改修第四編では、支派川改修を特集します。



町の歴史は川の流れとともに、治水事業とともに

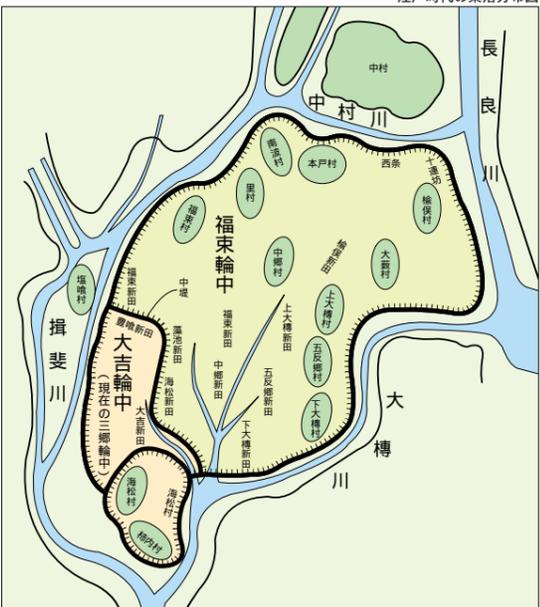


四方を川で囲まれた輪之内町はその名が示すように典型的な輪中地帯。宝曆治水、明治改修などの大規模な治水事業が実施され、西濃有数の穀倉地帯に成長。現在では緑豊かな水郷地帯をめざして多彩な事業が実施されています。

輪之内町の航空写真



江戸時代の集落分布図



輪之内町のあらまし

岐阜県の南西部、安八郡の最南部に位置する輪之内町は、長良川と揖斐川に囲まれた三角地域、河口からは約20km地点、海拔5m前後の起伏の少ない平坦地です。『輪之内』という地名が示すように、ここは典型的な輪中地帯。周囲を堤防に囲まれた福東輪中と三郷輪中による複合輪中で形成されています。

現在、町の四方を囲んでいるのは、長良川、揖斐川、中村川、大樽川の四河川。東境を下る長良川の河床が、西境を走る揖斐川より1mあまり高かったため、両川を横に結んだ中村川と大樽川の流れができました。一方、町内を西江川、中西江川、中江川、東江川という四つの江川が縦断して大樽川に合流し、揖斐川に注ぎこんでいます。北西の季節風・伊吹おろしも、この地域の特徴です。冬の強風は肌を刺す冷たさで

人が木に登り難を避けた助命木としても利用されていました。この他にも水屋（避難用の家屋）や助命壇（避難用に盛土された小丘）などの水防施設が点在。こうした輪中地帯ならではの風物詩は、明治以降の治水事業や土地改良事業などの成果によって、徐々に姿を消しつつあります。

地名が物語る古代の姿

昭和六〇年九月、長良川の河底から、長力キの化石が発掘されました。これは、海水に住む力キの一種で、約六千年前の縄文時代のころ、河口約30km地点にあたるこの地域も当時は海底で、伊勢湾が濃尾平野の奥深くまで入り込んでいたことが推定されます。「塩喰」「南波」「海松新田」などの地名は、かつての様相を物語るもの。「塩喰」は海水の干満が起るころを意味し、今でも300mの満ち引きが、「南波」は波のよせるところ



輪之内町出土弥生式土器1,500～1,600年前（輪之内中学校蔵）

ろ、すなわち、陸辺と海辺の境で海岸線を示しています。また「海松」とは海草の名前で浅海の岩に着生する藻で「海苔の」と。ちなみに、この海苔は神前に供える海の幸です。昭和四四年には、四郷地区から弥生後期・古墳前期の土器が多数発掘されました。四郷遺跡は、現在、岐阜県下の弥生式土器出土地の南限に位置する遺跡となっています。

変遷を繰り返した荘園支配

平安末期には大樽荘が成立しています。これは鳥羽天皇の皇女である上西門院の所領。ついで鎌倉時代には長岡荘や世保荘が、南北朝時代には二本荘が成立しています。貴族政権から武家政権へ、時代の変遷に伴い、荘園支配の姿も変わります。

「吾妻鏡」によれば、寛喜三年（一二三二）美濃国一帯に大飢饉がおこりました。時の執権北条泰時は家臣らに美濃国・株河駅につかわし、救済を命じました。この株河駅は株河に臨む東山道の宿駅「株瀬川」を指すと考えられ、当時の揖斐川筋の渡河地点にあたる重要な宿駅でした。この時、大樽荘では年貢が免除され、救済と増産をめざした施策で流浪者を受け入れませんでした。このことは開墾地が多くある魅力的な土地だったことをうかがい知ることができます。

戦国時代と江戸の支配機構

天下を競った戦国時代、美濃国一帯は斎藤道三の支配から織田信長へ、輪之内町の中央部にある福東城の城主は丸毛氏でした。この一族はもともと多芸郡に住み、斎藤氏に仕えた後、信長の天下統一事業に参加。福東城に入城したのは、豊臣秀吉が政治の実権を握った天正十四年前後で、二万石の

城下町でした。

関ヶ原合戦に際しては、西軍・石田三成方に参加し、大樽川をはさんで徳川方と戦います。しかし、大敗を喫って落城。大藪の北塚は、東軍・西軍の戦死者を弔ったところといわれています。

こうして江戸時代に入ると、幕府直轄領や大垣藩領、尾張藩領などに細分化され、分割支配地となりました。

大樽川は人工河川か自然河川か

天正十四年（一五八六）、木曾川の大洪水は木曾川の流路を一変させました。当時の福東輪中は、旧木曾川流路の大樽川に向かって尻なし状態にあつたので、出水のたびに遊水地帯となり、浸水被害を受けていました。ここに、元和二年（一六一六）から翌年にかけての相次ぐ大洪水により、堤防は決壊。このため、幕府の美濃国奉行岡田善同は、元和五年（一六一九）、大樽川右岸の築堤と浚渫を実施しています。つまり、堤防を築き廻して水害を防ぐとともに、大樽川を掘りささえて、堤防内の悪水の排除を目的としたのでした。

当時の模様は、「百輪中旧記」に「元和五年十一月迄、天樽新川出来」と記録されています。この記録が事実とすれば、大樽川は人工的に開削された河川だということになります。

これが、「大樽川は人工河川か自然河川か」と論議を呼ぶところになるのですが、江戸時代の絵図をもとに大樽川の流れを見ると、ゆったりと曲がりくねりながら、長良川と揖斐川をつないでいることがうかがうことができ、とても人工河川とは思えない景観です。だとすれば、先の「百輪中旧記」では、



丸毛軍が徳川方と戦った戦場 東大藪の北塚

天正の洪水により旧木曾川の河川敷となつていた大樽川を、新たに掘りさらえたので新川と受けとめたものであり、実際には、その川筋を生かし拡張工事を進めてきた洪水調節河川だったのであると考えられています。

福東輪中の成立と輪中組合

美濃国奉行岡田善同は、築堤と平行して新田開発を実施しています。政権が安定した江戸時代、財源確保をめざした新田開発が全国各地で奨励されていますが、ここでは治水と開墾を同時に着手。工事は元和七年（一六一七）から開始され、福東新田をはじめとした八つの新田（五千石・五百haの耕地）が完成。堤防に囲まれた福東輪中が成立しています。さらに、寛文年間（一六六一―一七三三）には大吉・豊喰の二新田を開墾、大吉輪中が誕生しました。

こうして水郷地帯の地盤は着々と築き上げられていきますが、いくら四方を堤防で囲んだとはいえ、依然、水害や渇水は悩みの種。せつかく大雨が降れば、濁流は堤防を軽く越え、せつかく雷田を呑み込んでしまいます。そこで結成されたのが、治水を目的とした組合です。福東輪中は本村十村に八新田が加わり一八村がまとまって、福東輪中一八か村の組合を結成。堤防の補強や悪水排除の扒樋などの補修を共同で行うようになり、寛文年間には大吉輪中組合が成立しています。

宝曆治水と明治改修

輪中の成立や新田開発が終わった元禄前後から、水害は毎年のように発生するようになり、一度、輪中に流れ込んだ泥水は幾つか月もひかず、輪中の排水対策に明け暮れる日々でした。輪中の人々は堤防の修復を願って必死に嘆願を続けました。こうした窮地を察した幕府は、近世史上稀にみる大工事・宝曆治水を行いました。

薩摩藩の御手伝普請による宝曆治水は、宝曆四年二月（一七五四）から着手。工事は一手から四一手まで大きく四つに分けて進め

られました。

中でも特に難事の一つだったのが三々手の大樽川洗堰の築造です。洗堰は長良川と大樽川の分流点に築造された堤防ですが、そのしくみは、出水で長良川の水位が上がったとき、石堰の高さを越えた水だけ大樽川に落とすというもので、多くの犠牲者を出しながらも、宝曆五年三月に完成。大樽川や揖斐川流域の治水に大きな効果をもたらしました。しかしその翌年には洪水で流失し、以来村々による自普請（費用も労力も村々でまかなう工事）を行っていました。

ところが、長年の土砂の堆積で川底が浅いが高くならず、洗堰は逆に輪中の排水障害や出水時の堤防決壊の原因ともなり、人々は出水と渇水被害の両面で苦しめられることになりました。

明治改修はこうした窮状を打開すべく実施された近代的な治水工事です。オランダ技師ヨハネス・デレーケの指導による木曾三川下流改修は明治二〇年から四期に分けて実施。大樽川は長良川との分流を目的とした締切工事が明治三三年の秋から行われ、翌年一月には完成し、その四年後には不要となった洗堰は取り壊されました。

開けゆく水郷地帯

明治時代に入り、廃藩置県や町村制が施行されると、この一帯は笠松県や名古屋県、岐阜県などに所属し、明治十一年には安八郡に所属するなど、幾多の変遷を繰り返した後、昭和二九年には輪之内町が成立。現在の町域を確定しています。町制施行以来、輪之内町は一度も大きな水



明治24年の濃尾震災で被害を受けた大樽川口（大樽）洗堰工事修理現場（片野記念館所蔵）

害を受けていません。これは明治以降の近代化政策のなかで実施された治水事業の成果です。その一方、用排水の整備や戦後の土地改良事業なども実施され、輪之内町は西濃有数の穀倉地帯に成長を遂げました。橋梁や道路網の整備も進み、昭和四七年には福東大橋、同六一年には平輪橋、昭和六三年には大藪大橋が完成し、さらに平成六年には主要地方道羽島・養老線も全線開通となり、今後の地域発展をになう動脈として期待されています。

現在は、第三次総合計画「夢タウンわのち21」も策定され、緑豊かな水郷地帯をめざして多彩な事業が実施されています。

参考文獻 『輪之内町史』 『開けゆく輪之内』 『ふるさと輪之内』 『わのち百話』 輪之内町発行

治水の恩人 片野萬右衛門

「文化六年（一八〇九）明治一八年（一八八五）萬右衛門は福東輪中の名家の生まれ。全生涯を治水事業に捧げています。嘉永七年（一八五四）の洪水で洗堰が決壊した折には、修復の金策に走り回り、慶應四年（一八六八）の洪水で決壊した堤防は私財を投じて修復。

明治二三年治水共同社初代取締役を引き受け、明治改修の折にはヨハネス・デレーケに長良川と揖斐川の分流を進言、西南濃全域の治水事業に取り組んでいました。この進言はその後実施された明治改修にも生かされています。



片野萬右衛門

干害を越え、湛水被害を乗り越えて、 充実の一途をたどる用排水事業

用水に苦しんだ上郷の村々
稲作地帯である輪之内町の最大の問題は
治水と用排水でした。治水事業は福束輪中全
域が幕府直轄地、大吉輪中が尾張藩であつた
ため、宝暦治水などの大規模な工事が実施さ
れ、他の輪中地帯に比べれば恵まれた状況に
ありました。

その反面、用排水問題は、輪中内の上郷
(上流部)と下郷(下流部)との対立が障害
となり、十分な施策がなされにくい状況でし
た。四方を川に囲まれ地下水源が豊富な福束
輪中でも、上郷の集落では、水田の用水に困
難を極めています。というも、堤防に樋門
を設けて川の水を取水することは、出水時の
堤防の決壊を招く恐れがあつたため、享保七
年(一七二二)、南波村の堤防に設けられて
いた用水樋樋が出水で吹き抜け、輪中全体が
水害に苦しむ事件も起きるなど、湛水被害も
しばしばでした。

そのため、用水樋樋を設けることはほとん
どありませんでしたが、日照り続きの年にな
ると上郷の村々から設置の要望が出されるこ
とも。しかし、下郷の村々の反対で実現しま
せんでした。

安永二年(一七七三)、ようやく南波村に
新しい樋樋一艘を設けることだけが認められ
ました。福束・里・南波・本戸・中郷の五カ
村組合が自普請(労力・費用とも村々でまか
なう工事)で築造した福束用水樋樋がそれで
、この他に樋樋のある集落は、大吉新田、豊
新田、上大樽村の三カ所のみ。多くの水田は
天水待ちの状況でした。そのため、大敷村の

へ流し出す計画が立てられました。
当初のこの方法では、揖斐川の水位が低い
時には有効でしたが、水位が上昇すると逆に
揖斐川の水が大樽川に逆流し、洪水を引き起
こす危険があります。

そのため、揖斐川の水位が低い時は開門し
高い時は開門して逆流を防ぐ「逆水開門」樋
門が築造されました。
「禹」とは中国の伝説上の王の名前で、洪
水を治めた人物です。
明治三六年、禹開門は大樽川締切堤に完成
し、その維持管理は福束輪中普通水利組合が
行いました。

しかし、禹開門は揖斐川の増水時には排水
の働きをせず、輪中内のたまり水は増えるば
かり。また、排水口が、揖斐川と牧田川、水
門川の合流点にあたることから、堆積する土
砂で水位が上昇し、平常時でさえ十分な排水
ができなくなっていました。

大正十年には開門の機能を強固にするため
にレンガ造りに修築し、平常時の排水をよくす
るために、出水口から本流までの排水路を、左
岸堤防沿いに下流に向かって掘削しています。
こうして禹開門の機能はやや回復しまし
た。昭和十九年・二〇年の地震で被害を受け
昭和二十七年には全面改築し、現在に至って
います。

日本初の蒸気排水機を設置した青樹英一
天保十二年(一八四一)、青樹英一は福束
輪中五反郷村の片野萬右衛門の次男として生
まれました。

青年期、漢字を修めて各地で見聞を高めた
英一は、幕末維新期の相次ぐ出水による輪中
堤決壊に遭遇し、治水事業の大切さを痛感
被災者の救援には父萬右衛門の片腕となり
、兄弟ともに奔走しています。
明治政府に水害の悲惨さを訴え、堤防復旧
費一万円を得て工事を起こし、その資金で被
災者の困苦の活路を開いたのは、三五歳の時で
した。

明治四年には海部郡佐屋町の庄屋青樹家に
婿入りし青
樹姓に。以
来、学校の
設立や新田
開発などの
公益事業を
積極的に進
める一方、
津島紡績株
式会社や津
島銀行、尾
西鉄道を設
立するなど、
実業家として
も手腕をふる
っています。また、
愛知県議会議長に選ばれるなど政治家として
も功績をあげています。

中でも特筆する事業は、日本で最初の蒸気
機関を利用した蒸気排水機場の設置です。明
治三八年、宝川の河口にイギリス製の蒸気機
関三基、ポンプ六基を備えた孫宝排水機場を
設置。この新しい試みは、明治十九年、水田
を走る汽車とともに注目を浴びています。
この技術力をベースに、福束輪中にも蒸気
排水機場が設置されました。

明治四〇年、揖斐川への排水を目的に仁木
排水普通水利組合が結成され、同年工事に着
手、四年には大吉新田地内の堤防沿いに、
仁木蒸気排水機場が完成したのです。
高い煙突とレンガ壁の排水機場は、二二〇
馬力の蒸気原動機二台を有し、その能力は
福束輪中の水を一日夜で約1寸3分(約4部)
排出できるもの。設置場所が禹開門よりは
るか北にあり、大樽川からも離れていたた
め、中江川から中西江川の合流点から排水
機場までの導水路を開削しています。

輪之内に生まれ、縁あって他郷へ移った英
一は、仁木排水機場の完成をもって、故郷へ
錦を飾ったといえましよう。
着々と進行する現在の用排水事業
しかし、こうした用排水事業も根本的な解
決とはならず、人々は日照りや悪水に悩ま

と排水機の設置によって廃止されました。

四間門樋の設置

福束輪中の南部、海松新田は大小の江川が
中江川と西江川という二の流れにまとまり大
樽川に合流するところ。梅雨や秋の長雨時な
どには大樽川の水かさが増し、江川の水もあ
ふれて、田畑にとっぴりと水がつき被害をも
たらしました。

そのため、中江川と西江川には、「三間門樋」
と、「四間門樋」が設置さ
れていました。
中江川は福束輪中中央
部を流れ海松新田で大樽
川に合流する江川。西江
川は大吉輪中と福束輪中
を流れ同じく海松で大樽
川に流入する江川。江戸
時代、数十m離れた二つ
の江川に門樋が設置され
たのでした。

この門樋は、大樽川の
氾濫を防ぐもので、輪中
内の水位が高い時には門
樋が開いて内水を放出し
、逆に大樽川の水位が高い
時には、門樋が閉じるし
くみとなっていきます。
また、船が通航できる開
門のシステムも有してい
ました。

しかし、この門樋も歳
れ続けました。そこで岐阜県は、昭和九年よ
り用排水事業に本格的に着手。大敷町十連坊
に揚水機を設置し、大敷町と福束村の灌漑用
水を整備する計画を立てています。しかし第
二次世界大戦のため実行されず、同時期、福
束輪中でも用水路の整備が始まりましたが、
これも事業半ばで中止の憂き目に、用排水計
画が本格化されたのは戦後のことでした。

昭和二十七年、福束輪中土地改良区が発足し、
県営の用排水事業が着々と進行。東江川、中
江川、中西江川、西江川及び大樽川の水路を
改修し、屈曲部や狹窄部では付替工事などを
実施しています。

また昭和三十七年からは、福束輪中県営湛水
防除事業が開始され、伊勢湾台風や集中豪雨
などの大規模な天災にも対応できる排水機の
改良をはじめ、東江川や大樽川の改修が実施
されました。

さらに、昭和六三年からは、最新式の排
水機場づくりが始められ、それと平行して
排水路の改修や排水幹線の浚渫も実施。こ
うした用排水事業は大きな成果を上げ、現
在、福束輪中は西濃の穀倉地帯の一角を担
っています。

参考文献
『ふるさと輪之内』
『開けゆく輪之内』
『わのつち百話』
『大樽川』輪之内町発行

めざせ二一世紀型農業
水田農業モデルは場整備促進事業。中郷新田地区
県営ほ場整備事業中郷新田地区は、低コスト
大区画ほ場整備事業を実施しており、また、
二一世紀型水田農業モデルほ場整備促進事業
により、経費の負担軽減を行っています。ほ
場整備事業により基礎の再整備を行う一方
、営農については地元営農組合である中郷上農
業共同経営組合、中郷農業共同経営組合に基
幹農作業を委託し、さらに、専業農家に農地
の利用権設定をすることにより経営規模を拡
大し、生産コストの低減を図る事業を進めて
います。



悪水の吐き出し—史跡 四間門樋跡 所在 / 海松新田

水田を潤す水をいかに調達するのか。

沼地のような田畑の水をいかに排出するのか。
用排水は地域の存亡をかけた一大事業。
輪中が成立した江戸以降、

利害が相反する上郷と下郷は
紛争を繰り返しながらも、
排水路や門樋などを築き上げてきた。
そして今、用排水の整備は進み、
豊かな水郷地帯に成長を遂げています。

月ともに排水機能が衰え、壊れたまま放置
されるようになりました。

そこで明治十年には、福束輪中の代表が
岐阜県令に門樋の築造を嘆願し、翌年には、
片野萬右衛門が設計図を作成、明治十二年
には県令より四間門樋新築の許可があり
ています。

門樋の工事は明治十二年に始まり、翌年
は完成。県からの補助金は総額の一割にも満
たぬ少額なものでした。その窮状を片野萬右
衛門は、明治十六年、岐阜県令に提出した文
書の中で、「すでに門樋が完成してから三年
工事費を集めて支払をすることができない状
況です」と訴えています。

こうした萬右衛門らの献身的な努力は美
り、四間門樋建築代金の調達、関連水路の拡
幅工事及び新川の堤防の高上げ工事などがす
べて実施され、湛水による被害は少なくなり
ました。

しかし、その後を実施された大樽川の締切
や禹開門(後述)の設置などにより、門樋の
働きは薄れ、大正十一年には取り壊されまし
た。この門樋があつた場所には橋が架けられ
、「四間樋橋」「二間樋橋」と名づけられました。

禹開門(逆水開門)の設置
木曾三川分流を実現した明治改修によつて
大樽川が締め切られるまで、福束輪中の排水
は、輪中堤の木造樋管を通して、揖斐川と大
樽川に排出さ
れていました。

しかし締切
で大樽川を堤
防で囲んでし
まうては、排
水ができなく
なってしまう
ます。そこで
開門を設置し、
大樽川を排水
の幹線水路と
して、揖斐川



昭和27年に改築した禹開門

門樋の図(片野萬右衛門作図)(片野記念館所蔵)

粥のつけ1月15日

福東新田の白山神社、下大樽の加毛神社、里の八幡神社、福東の白鹿神社、塩喰川西の白山比売神社では、毎年1月15日未明、「粥のつけ」が行われています。これは農作物の作柄を占う神事で、この日、神社では、鍋と釜で白粥と小豆粥の2種類の粥を煮ます。白粥は神前に供えるもので、節のない女竹を粥の中に入れて炊き込み、炊き上がった時に竹の管に入った粥の量で、その作物の豊作、凶作を占います。この神事は100年以上前から継承されています。



気ままにJOURNEY

た箱を棒杭の頭につけてこの地に建てたことからは、「御一万度」といったことに始まるといわれています。それがいつのまにか、「一」が省略されて「御万度」と呼ばれるようになったといわれています。

また、「一万度のお被い」をした札箱が五本建てられたことから、「五万度」と呼ばれるようになったといわれています。

この他にも、お祭りに多くの万燈(提灯の一種)を灯したことから「御万燈」という説もあり、さらに、一万石の福東輪中を守るために、多度神社から分身をお迎えたので、「一万石の「万石」と多度の「度」をとって「万石度」というようになったという説もありです。

いすれにせよ、福東輪中の人々の祈りの現れであり、大切な水神様だったのです。



助命壇もかねた水神 ごまんど



大樽川の水面に映る、今昔物語

築き上げてきたのでした。そんな先人たちの足取りを追いかけて、冬の旅の輪之内町を探索してみることになりました。

濁流の人柱 舩屋伊兵衛

時代をさかのぼること二四〇年余り。この地で近世史上、稀にみる大工事が敢行されました。薩摩藩の御手伝普請による宝暦治水がそれ。ここ輪之内で計画された大樽川の洗堰工事は、ひときり難しいものでした。長良川と大樽川の合流点は、二mあまりの河床の落差で、つまり激しい流れ。ここに石材を洗め、堰をつくるという工事でした。



舩屋伊兵衛の墓 円楽寺

しかし、ショベルカーもブルドーザーもない江戸時代のこと。その労苦は私たちの想像を超えるものでした。遅々として進めぬ工事を、完成をまじかに濁流にのみ込まれる石堤。そんな工事を見るに見かねて、ただ一人人柱になった人物がいます。

舩屋伊兵衛がその人です。伊兵衛はそもそも養老郡多良の生まれ。領主高木内膳の下人となって江戸・神田細屋町に住んでいました。しかし、宝暦治水が始まると、内膳とともに美濃へ。幕府方として工事に参加していました。

宝暦治水の悲劇は、難事業であったこともさることながら、薩摩藩への厳しい管理と規制を見逃すことができません。



輪之内町の薩摩塚治水神社

一汁一菜と決められた食事。あばら屋同然の小屋には薄いせんべ布団がたった一枚、空腹に泣き、寒さに震える薩摩藩士の日々は、まさしくつらく厳しいものでした。

そんな凄惨な日々を見るにつけ、伊兵衛は心を痛めていたのでしょう。同情と厚意を寄せるようになっていました。

藩士たちの命がけの作業により、ようやく基礎ができた喜びもつかの間、大水で洗い流されてしまい、途方に暮れる始末です。

思うように進まぬ工事に、出張小屋では相談が続きます。「この席にいわせた伊兵衛は、心中期することあつて口を開きませぬ。」「この工事が進まないのは、水神の怒りによるものかもしれない。人柱を立ててはいかがでしょう?」



心臓院薩摩義士の墓

思いがけない伊兵衛の話に薩摩藩士たちは驚きました。しかし、他に良い方法も見つからず、神にもすがらる思いで賛成したので。続けて伊兵衛は言いました。

「このなかで、

はかまの裾にほころびがある者を人柱に立てましょう。いくら忙しいとはいえ、裾がつくるえないような怠け者にこそ、人柱として工事のお役に立ってもらいたくないか?」

一同は伊兵衛の考えにうなづきながら、お互いの裾を調べ始めました。すると驚いたことに、裾がほころびた者はただ一人、伊兵衛だったのです。「言いましたのは、私です。人柱になってお役に立ちましょう!」

「ついでに、伊兵衛はさつさと身を清め、白装束をまとって、うすまろ濁流に身を投げたといわれています。

おそろく伊兵衛は、最初から覚悟の上だったでしょう。残された薩摩藩士たちは、伊兵衛の死を無駄にしないため懸命に工事を進め、最大の難関であった工事を乗り切ったと伝えられています。

伊兵衛の墓は、東大坂の円楽寺に残されています。

また、楡俣新田の江翁寺や下大樽の心臓院には、工事で無念の死を遂げた薩摩藩士の墓があり、昭和五五年には町内に葬られている八人を祀った薩摩塚治水神社が建立されました。

助命壇もかねた水神「ごまんど」

海松新田の南、四門橋に続いて三門橋を渡ると、大樽川旧堤には今もつうそうと木が茂る高台が目にとまります。「ごまんど」との呼び名で親しまれている多度神社です。

多度神社の御祭神は天照大神の御子、天日子根命で、三重県多度町多度神社の分社「伊勢」に参らば、多度をもかけよ。お多参らにや片参り」と唄われたほど由緒ある神社で、雨や雪や風水害、火難の災厄に霊験あらたかなる古社です。

「この「ごまんど」さんは、「御万度」とか「五万度」「御万燈」「五万石」などと、いろんな字が充てられており、その由来についてもさまざまな説が伝えられています。

まず一つには、度重なる水害に苦しんだ福東輪中の人々が、多度神社からごまんどをお迎えし、「一万度のお被い」をしたお札を入

を乗り越えて団結し、従来になかった事業組織を誕生させたのです。

こうした構想は、江戸時代の株井戸制度(二三四頁参照)に端を発するもの。天保年間(一八三〇~四四)、三〇代の若きで庄屋職に就いた萬右衛門は、父が残した家訓正直と慈悲、堪忍を本として忍を忘れず、身を低くもて、を終生の戒めとして、治水事業に尽力したのでした。

しかし、対立する上郷と下郷の問題を解決すべく株井戸制度を設けても、深夜に井戸を掘る人もあり、心底人々の融和を図ることはできませんでした。

萬右衛門は考えました

「治水事業を完成させるためには輪中意識を打ち破ることに、莫大な費用がかかる工事は、異や国の力を借りることなんだ」

こうして生まれた治水共同社は、地域住民はもとより多くの役人からも支持も受け、当時、国の土木局長であった石井省一郎は五十万という大金を寄付しています。

萬右衛門は木曾三川分流工事が着手される前の明治十八年に没しています。彼の功績は福東輪中から出た大正期の衆議院議員・牧

片野知二氏

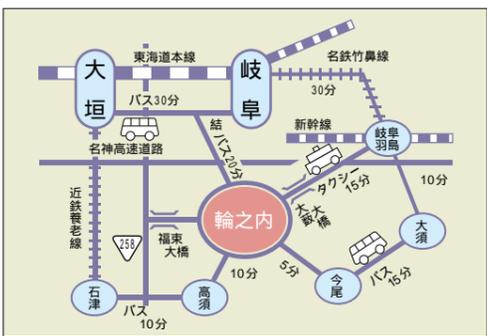
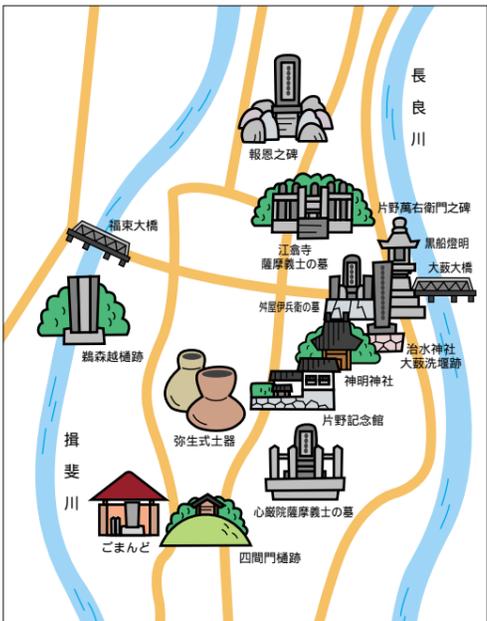
野鉄九郎が次のように称えています。「立派な家を建てた品物を集めて鑑賞し、公のためには何もやらないのがいままの人のやが、万ねさ(萬右衛門のこと)は堤防を守り、住民の生活を守り、農業を発展させることを無上の喜びとした。多くの物を人に与えたが、自らは少ししかとらなかつた。四郷にある片野記念館は、萬右衛門の末裔、片野知二氏が設立した私設博物館。萬右衛門の遺品ももちろんのこと、片野家に伝わる貴重な歴史資料をはじめ、約六千点にも及ぶ近世庶民資料、岐阜県中世文書写本、郷土文遺墨、美術品などが保管・陳列されています。



片野記念館

輪之内町行事

治水神社 春の大祭	4月
ぞうすい祭り	7月
納涼ふるさと祭り	8月
輪之内町産業祭	10月
ごまんど祭り	10月
治水神社 秋の大祭	10月





大正改修と支川改修事業

上流改修からやや遅れた昭和三年。濃尾平野を網流する十八の支派川の改修が着手されました。これは、全国の中小河川の改修に先鞭をつけたもの。国庫の補助、県の施工により、流路の整理、河道の掘削、樋門の整備などを実施。木曾三川上流部の改修と平行して行うことで、充分な洪水防体制をめざしたものでした。昭和二五年から中小河川改修に受け継がれました。

支派川改修

犀川ほか2河川(計13河川)			境川ほか2河川(計14河川)			
河川名	着工	竣工	河川名	着工	竣工	
犀川	○犀川	6.4.12 6.3.31 (中小河川改修事業に引継)	境川	○境川	7.9.19	18.3.31
	○五六川			○大江川	8.9.	10.7.
	○中川			○荒田川		
	○天王川			○論田川	16.8.27	17.5.
	長護寺川	6.3.5	鳥羽川	○鳥羽川	6.3.5	17.3.31
	板屋川			伊自良川		
	○根尾川		11.11.16	粕川	○粕川	5.3.30
	○糸貫川	6.8.1	水門川	○水門川	8.1.4	26.3.31 (中小河川改修事業に引継)
三水川	○三水川			杭瀬川		
	○花田川	11.2.16		相川	11.3.28	21年度
牧田川	上流	6.3.1		大谷川		
	小畑川	9.3.		泥川		
	金草川	16.2.24		色目川		
				津屋川		(調査のみ)

注) ○...国が県より受託施工

支派川の改修は県営の事業でしたが本川の直轄施工と一体となって同時に施工するのが有効な一部の支派川に関しては、建設省(当時・内務省)が県より受託して直轄施工を行っています。

建設省が直轄施工したのは、犀川(五六川・中川・天王川を含む)、三水川、花田川、根尾川の七河川で残りの十八河川は県が直轄施工しています。

主な支派川改修



新三水川

犀川の間にある三水川は、川床が両河川より低いために湧水が多く、揖斐井水・更地井水などの流末に当たり、この地域における悪水幹川でした。

灌漑面積は比較的小なく、本巢郡真正町・巢南町を主とする二七〇ha。なお、平常時から水量が多く流れも緩やかであったため、舟の利用も盛んで、この地域に古墳が多いのも、三水川があったためといわれています。

改修当時の三水川はほとんど無堤状態。また、藪川との合流点に逆水樋門がなかったため、藪川が出水した際は逆流の影響を受け、加えて上流部は水路が曲折して洪水の疎通が悪く、沿川いたるところで氾濫しています。その浸水区域は、下流の花田川流域にまで及び、その面積はあわせて約六〇〇haに達していました。

三水川の問題点は、大きくは藪川の逆流の影響を受けること、流路が屈曲及び河槽

が狭小であること、下流部の寺田及び長田悪水の合流形状が悪いこと、などが挙げられ、次のような改修計画が策定されました。

- 一) 計画高水流量は毎秒五〇m³とする。
 - 二) 従来の藪川合流点を締切り、藪川右岸新堤に沿って約一・六kmの新川を開削して、合流点を下流(座倉地先)に付替え、水位の低下を図る。
 - 三) 上流部の屈曲箇所は新たに延長二kmに及び捷水路を掘削して矯正する。
 - 四) その他の箇所も、掘削、浚渫を行って断面を矯正する。
 - 五) 藪川との新合流点から寺田悪水の吐口にいたる新水路右岸には築堤、堤防高は、合流点の高さと同じ背水堤。
 - 六) 新水路の両岸には右岸護岸を施工する。
 - 七) 付帯工事として、橋梁の架設、用悪水路の分水及び吐出先の整備などを行う。
- 工事は直轄施工により昭和六年に着工、竣工は同十七年でした。
- 《水門川の改修》
水門川は、牧田川の左支川で大垣輪中最大の内水河川です。また、大垣市中心部から水門川・牧田川・揖斐川を経て伊勢湾に通ずる航路として使用されていると同時に、沿川の灌漑にも利用されてきました。
- 改修当時の水門川は、岐阜県安八郡中川村(現・大垣市)の林中に始まり、大垣市街地を縦貫して市内の



水門川古宮悪水閘門・古宮排水機場

河川改修の進捗と輪中地帯の内水被害
木曾川上流改修の実施に際して、懸案事項のひとつに支派川改修をあげることができず(詳細はKISSO十六号、七、八頁参照のこと)。

木曾三川の洪水防衛に対しては、先に実施された木曾三川下流改修や上流改修により、充分な体制が整えられましたが、支派川が網流する濃尾平野の特性を考えれば、本川改修のみでは充分ではありません。

そこで昭和三年から、支派川改修が着手されました。しかし、輪中地帯特有の水防意識・輪中意識が災いし、着手までにはいろいろな曲折がありました。

例えば、境川・荒田川などの悪水河川を内部に抱える加納輪中では、明治四五年組合会の決議により、上流改修に反対する意見書を提出しています。この意見書では「下流改修の結果、洪水防衛は図られたが、輪中内の悪水の排水は困難になっており、この上、上流部の改修によってさらに河川に土砂が堆積するようであれば、当輪中では収穫が望めなくなるので、まず悪水の疎通をまっとうすることを図ってほしい」と訴えています。

しかし、大局より見た国や地方当局並びに有識者の熱意によって上流改修工事は着手されることとなり、これを契機としていわゆる先祖伝来の輪中意識の垣根を取り払い、根本的治水事業や支派川改修に取り組もうという気運が高まりました。

大正十五年、西南濃地方の水利組合は連署して支派川改修費国庫補助の陳情書を提出しています。この陳情書に署名した普通水利組合及び水害予防組合は、岐阜県下の穀倉地帯全区域に介在する五三組合という多数に及び、このことから支派川改修工事の重要性を推し量ることができます。

こうして背景から昭和三年五月、第五五臨時議会において支派川改修事業の予算がつ

下水を集め、安井村(現・大垣市)築港地先で左支川・東中之江川を合流、浅草村(現・大垣市)で水門川開門を経て、大垣輪中の堤外へ出た後、左支川・古宮悪水などを合流し、養老郡池邊村(現・養老町)横曽根地先で牧田川に合流する本川延長十三km、流域面積約四五ha河川でした。

大垣市の中心部などは、部分的に川幅が狭く、河床も高く、また、灌漑のために毎年土堰を設けるため、船の航行には不便をきたしており、河床の整理、水路の改修、堰の撤去などの悪水の排除と舟運の利便を図る必要が生じていました。

昭和五年、改修に先立ち、二〇ヶ所の量水標を設置し、三ヶ年に渡る水位の調査が実施されました。その結果、輪中内の悪水停滞の原因は、各水路が用水と排水とを兼用していることから、水路内に堰を設けているためであり、また、降雨時に自由に開閉できないことにも起因するものでした。

そこで、用悪水兼用の水路を整理して、用水と悪水とは別々の水路として整備するとともに、水門川の改修を行うこととしました。

昭和八年、工事は着工されましたが、同一三年の異常出水では、主要部分が完成していたにもかかわらず、流域は大水害をこうむり、当初計画に再検討を加える必要が生じてしまいました。

水門川改修工事概要

流域面積	44.7km ²	水門川本川 9.2km ² 左支川東中之江川 11.8km ² 右支川江西江悪水 8.2km ²	左支川古宮悪水 9.5km ² 右支川鶴森悪水 6.0km ²
計画高水流量	67.1m ³ /sec (流域面積1km ² につき1.5m ³ /sec)		
改修区域	総延長 84.593m	水門川本川 12.915m 支川7水路 27.867m (用水3水路を含め44932m) 随用排水12水路 26.746m	
当初予算	983,500円(着手時) (事務費 52,000円・工事費 732,000円・附帯用排水路工事費 199,500円)		
施行年月日	着工 昭和8年1月4日～竣工 昭和26年3月31日(中小河川改修事業に引継)		
竣工金額	84,109,400円(国庫補助金 41,456,500円)		
主な工事	築堤 23,662m ³ 護岸 3,461m 排水機 5箇所(古宮組合・鶴ノ森組合・水門川・鶴ノ森集水路・江西江低地部集水路)	掘削及び浚渫 420,708m ³	
附帯工事	橋梁 26箇所 用水堰 2箇所 用水路(下立・柿ノ木戸・禾ノ森) 2箇所 悪水路(清水・可能・見取町など)	樋管 1箇所 本川逆水樋門 1箇所 集水路(鶴ノ森・江西江低地部)	

その結果、在来の逆水樋門の拡築と排水機(旧水門川排水機場・旧古宮排水機場・旧鶴森三郷排水機場)の新設により、自然排水の増加と機械排水との併用による内水排除としました。また、舟運のため抗樋護岸と浚渫を行うこととし、昭和一六年に事業費を増額施工しています。

しかし、第二次世界大戦中、工事は一時中断、昭和二一年物価高騰のため、事業計画等を改定。昭和二五年には本川逆水樋門の拡築にあたって水位せき上装置を設けて用水不足を解決し、開門を設けて船運の便を図ることに変更。昭和二六年以降は、中小河川改修事業で施工。昭和二七年度に完成。改修概要は、右の表に示すとおりです。

揖斐川支派川での大正改修を診る



安藤 萬壽男先生

略歴
愛知大学名誉教授・前愛知産業大学総長・経済学博士
『輪中 その形成と推移』など輪中に関する著書、論文多数。



粕川 雁永橋より上流を望む(左 池田山、右 小島山)

「この露堤があっても、この粕川流域では何度も洪水、露堤にみまわれている。」
一方、粕川の扇状地上では灌漑用水で非常な苦労を重ねてきている。それは、粕川の山地での延長が長くないので、干天時の流量量が少なくなる上に、扇状地上の水田では用水の地下浸透が多いため、大量の用水が必要であるからである。粕川では扇頂部の市場(現、揖斐川町内)に堰を設け、左岸に小島(現、揖斐川町内)に堰を設け、右岸に池田の両井水に分けるなどしてきたが、その分配をめぐっては争いが起り、また同一水路上では上流の村落の取水が優先するので、下流部の水田の用水が不足する苦労もあった。用水の分配をなるべく公平にするように、ここでは、数川流域と同様に、引用する用水量とその時間をきめて分水する番水制が行なわれていた。

二、粕川での大正改修 粕川の改修区域は粕川の扇状地部分の約5kmである。工事の主

はじめに
揖斐川は長良川に比べると、本川や支派川が形成した扇状地が非常に多い特徴をもっている。それは揖斐川が濃尾平野の北と西をめぐる山地に沿って流下しているからでもある。揖斐川やその支派川は山地から平野に出るとき、必ず扇状地を形成しているが、その扇状地の面積や傾斜はその川の流域の長さなどが係わって大小さまざまである。そして、それらの支派川が大雨時に本川に合流する時の流出の時間や流速もそれぞれ異なり、それがもたらす水災も支派川ごとに特徴がある。

この揖斐川の本支川が形成した扇状地ならびにそれに続く自然堤防・後背湿地帯は日本史の中では早くから開け、そして保水性が乏しい扇状地では灌漑用水が必須であった。このため、支派川改修では付帯工事として用水関係の工事が必要であった。

以下においては、大正改修時に揖斐川支派川改修において、最も規模が大きく、かつ、特徴のある二つの工事を選んで述べることにする。

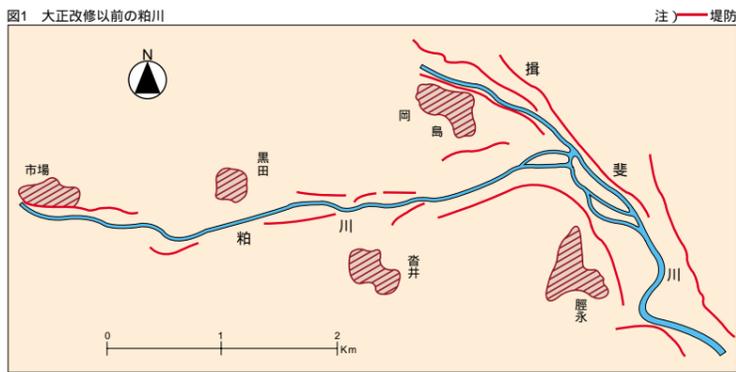


図1 大正改修以前の粕川 (陸地測量部5万分の1「大垣」(明治39年測図)により作成)

一、改修前の粕川
揖斐川の支派粕川は伊吹山地に発して流域面積約七・七km²、流路延長約二〇kmの川であるが、山地から濃尾平野に急流するので、谷の出口に形成された扇状地は粗粒の土砂からなり、河水の地中への浸透性が高い。扇状地の傾斜も急(改修工事での計画高水勾配は1/120〜1/150)であり、これまではこの川が山地を出てから、しばしば流路を変更しつつ、急傾斜の扇状地を形成してきた(図2の等高線参照)。大正改修前には粕川は扇状地上では天井川としての特徴をもち、そして、粕川が揖斐川に合流する同川下流部では、北派川、南派川に分派していた(大正改修で北派川締切)。このように、平野部での粕川はいわば「暴れ川」であったので、歴史的にも治水に苦難を重ねてきた川であった。

大正改修以前の粕川の治水に見られる特徴はその両岸を多数の露堤で守ってきたことである(もともと下流部の右岸は連続堤)。その露堤をここでは「露堤」と呼んでいるのは、近世に美濃国代官であると共に治水巧者でもあった岡田将監の名に由来している。しか

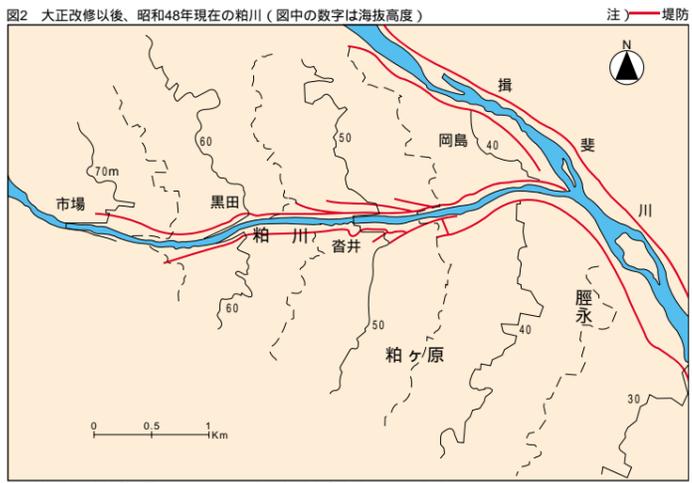


図2 大正改修以後、昭和48年現在の粕川(図中の数字は海拔高度) (国土地理院 土地利用図2.5万分の1、昭和48年調査「池野」により作成)

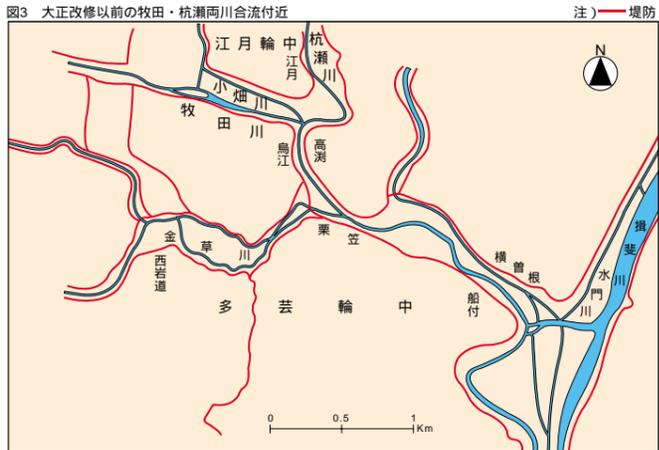


図3 大正改修以前の牧田・杭瀬両川合流付近 (陸地測量部2万分の1地形図「高田町」(明治24年測図)により作成)

町内)に堰を設け、ここから揖斐川の左右両岸に用水を供給し、西岸の西濃用水事業(昭和五九年完成)では、揖斐川上流の横山ダム(昭和五九年完成)の上は、揖斐川町から下は養老町、大垣市におよぶ広範囲に用水を供給している。

牧田川杭瀬川合流地区の改修
一、改修前の合流地の周辺
牧田・杭瀬両川が合流していた地区の付近には金草・小畑の二川も合流しており、治水上の難所であった。牧田川は鈴鹿山地や伊吹山を水源とし、流路延長四・八km、流域面積三・四七km²を占める大きな支派川である。山地を出る処から扇状地を形成するが、上述の合流地点はその扇状地以下にあたる。しかし、大正改修以前は牧田川が扇状地上では天井川であった。杭瀬川はかつては揖斐川の本流であった川で、牧田川に合流するまでに大谷川、相川などの支派川を合せて流下している。

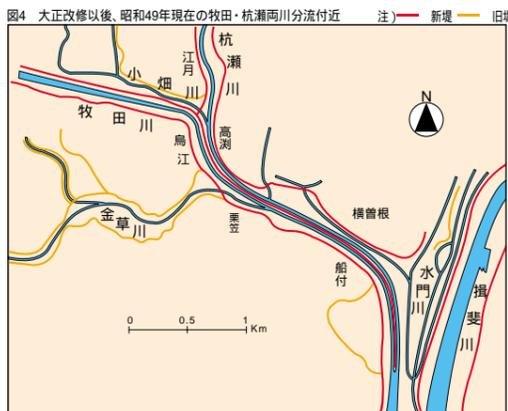


図4 大正改修以後、昭和49年現在の牧田・杭瀬両川合流付近 (国土地理院 土地利用図2.5万分の1、昭和49年調査「養老」により作成)

なものの第一は扇頂部の市場の付近に堰堤を設け、砂防の目的を兼ねると共に、扇状地のいくつもの灌漑用水路をここで統一して設けること、その第二は多数の露堤を温存しつつ、露堤と露堤との間の無堤部分には新堤を築くなどして、両岸に立派な連続堤を築くこと、その第三は掘削などをして天井川の性格を改めること(図2の等高線参照)、その第四は粕川と揖斐川とが直角に合流していたのを改め、粕川の合流点付近で南に新川を掘り、揖斐川本川の流勢の圧迫を緩和すること、その第五は北派川を締切ること(既述)などである。

この大正改修の付帯工事として用水路が近代的に統一され、用水不安は大きく解消した。用水源としては扇頂、扇状地の部分には近代化した粕川からの用水路に依存し、扇状地部分は旧来通り、揖斐川本川からの取水である。しかし、揖斐川の河床が大正改修などで低下したの



牧田川杭瀬川分流堰功記念碑

このように牧田、杭瀬両川が合流する地点には上述の諸川が流下してくるのに、この合流地点が狭隘のため、水害が頻発し、また排水に苦しんでいた。このように、大正改修以前は、この合流地点が狭隘のため、水害が頻発し、また排水に苦しんでいた。このように、大正改修以前は、この合流地点が狭隘のため、水害が頻発し、また排水に苦しんでいた。

水も不良であった。例えば、悪水停滞のため、江月輪中では天明四(一七八四)年、自費で牧田、金草両川の下を伏越するなどの努力をして悪水を多芸輪中の中を通って排出している。これらの悪条件を克服するため、水害に苦しむ村々は元禄六(一六九三)年、幕府に対し、狭隘部の高瀬以下に四三〇間(約〇・八km)の新川を掘ることを要請したが認められず、この合流地点周辺とその上流部はこれら諸川の遊水地の機能を失われて大正改修時におよんだ。

二、合流地区付近での大正改修 大正改修での工事の中心は高瀬付近より下流三、四kmにわたり、背割堤を築きつつ、新しい杭瀬川を掘って牧田川から分流することであった。そして、従来は牧田川に合流していた小畑川は水位の低下した杭瀬川に合流させ、また金草川は、その高位部の水は従来通り牧田川に排出し、低位部の水は牧田川を伏越して新しい杭瀬川に排出することにした。

以上の工事は大正改修開始早々に計画したが、計画案の確定に時間がかかり、昭和八年工事に着手、粘土質の土質や湧水に苦しめ、かつ工期が戦時体制下に入ったため、資材ならびに労働力の不足に苦勞を重ね、昭和二九

BOOK LAND

『開けゆく輪之内』
輪之内町企画課発行

町制四十周年記念事業として刊行された本著は、いわば町史のダイジェスト版。

次代を担う青少年たちに、もっとふるさとを知ってもらいたい。もっと、愛してもらいたい。そんな願いのもと、祖先の歩んだ道のり、輪中の暮らし、有形無形の文化財など、輪之内町のすべてがわかりやすく編集されている。

二一世紀にむけて、岐阜県では、教育史、県史、文化史の編纂事業が始まることになっているが、そのうちの先鞭をつける貴重な一冊である。

民話の小箱

ぞうすい祭り

五百年ほど昔のお話です。

毎日降り続く雨に村人たちは、

「大水にならんけりゃいいが」

と黒塗をにらみ、雨が止むように祈りました。

しかし、大樽川の水かさは増すばかり。

増水した水は堤防を乗り越えんばかりに、

盛り上がり流れていきます。

濁流は上流の村を呑み込んでしまったのでしょいか。

大きな立木をものすこい勢いで押し流し。

牛も馬も人間も容赦なく呑み込んでいきます。

堤防に立つ村人も、助ける手だてさえなく、

ただ、呆然と見つめているより仕方ありませんでした。

「あれはなんじゃあ」

突然の男の声に、村人は川面に視線を走らせました。

「あれは、お社じゃなからうか」

「ひょっとしたら、上郷の神様が流れてござったんじゃなからうか」

目をこらせば、小さなお社が濁流に流されていきます。

その晩村人は、堤防の上の仮小屋で過ごしました。

交代で見張り番にたち、残った人々は冷えきった体をお互いに寄せあって仮寝をしました。

その翌朝のこと。見張り番の大声で人々は目を覚ました。

昨日のお社が逆流で押し戻されて、堤防に流れついているのです。

村人は神様が流れつくれたことをこのほか喜び、

疲れていた者も、神様をお迎えるのだと勇みたちました。

長老がうやうやしく堤防を掃き清め、お社を移しました。

しかし、洪水の最中のこと。

神様にお供えるものは、何もありません

とありえず、わずかばかりの米をこいで

ぞうすいを炊き、お供えをしました。

それ以来、この神様を堤防の守護神として、

大切に祀ってきました。

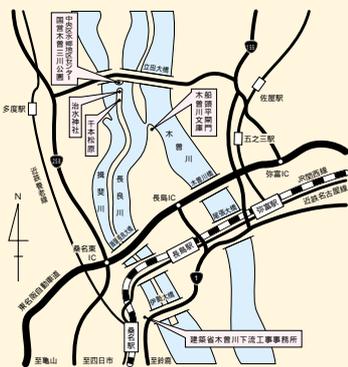
このお社が大樽の神明神社で、

毎年七月十六日には、「ぞうすい祭り」がおこなわれています。



上大樽・神明神社

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

建設省では、平成9年度から始まる第9次治水事業5箇年計画の策定に際し、地域の人々からお聞きした意見や、地域の川への想いを反映する「川づくり」を進めています。昨年末から「木曾川文庫」「アクアプラザながら」をはじめ木曾三川下流域の8つの資料館がタイアップして「水郷資料館スタンプラリー」を開始。6つの資料館のスタンプを集めれば素敵なテレカをプレゼントしています。ルートマップは各資料館に用意しています。お気軽にお問い合わせください。

Vol.21の編集にあたっては、輪之内町と安藤萬壽男先生、片野知二先生にご協力をいただきました。ありがとうございました。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は木曾川文庫まで。

今回は岐阜県笠松町を特集します。ご期待ください。

表紙写真

上:大樽川下流域(平成6年)

下左:薩摩堰遺跡碑

下右:四郷地区片野雅夫邸水屋